

世界展開力強化事業 メキシコ 帰国報告書

農学科 3年 川端美潤

約5か月間の留学生活がケガもなく無事に終わられたことに今、安心している。5か月間はあっという間でもあり、時には時間の流れがゆっくりと感ずることもあった。今は、チャピngo自治大学での学校生活や冬休みの友人宅への訪問など、充実しており楽しかった、留学に参加してよかったと自分にとってプラスの思い出が頭の中によぎる。しかし、よく考えると盗難にあたりビザや寮に問題があったり、時には文化の違いによるストレスや先進国の人が発展途上国で生きることの難しさにも出会った。悪い思い出も今では笑って話せるほど、現地の友人や先生方、その家族の方に良くしてもらい、全体を通してみるとこの5ヶ月間はこれからの自分の人生に学習面だけでなく生活面や精神面などで学べたこと、自分を強くしてくれたことが多かったと感じている。

前回の報告書を提出したのは11月の下旬ごろであったが、まずはその後から帰国するまでの出来事を報告したいと思う。

11月下旬から12月上旬の学期末は今振り返っても人生で一番、宿題や勉強に励んだ時間だったと感じる。3つしか講義を履修していないのにも関わらず、毎日宿題の山に追われ、合間には試験勉強、毎晩22時近くまでプレゼンテーションがあり、必死に1個ずつこなしていった。8月の中旬、授業に参加してすぐに、クラスメートから「学期末は寝られないよ」と警告を受けていたが、その意味をこの頃ようやく理解した。宿題を取り組んでいたころは、終わらすことに必死になっており何も感じていなかったが、短期間の中で論文や講義にかかわる書籍を読み、要約するというをいくつも行っていたので、今現在行われている熱帯果樹やインビトロ栽培における研究や存在する栽培品種の特徴など、多くの知識を得られたと感じる。そしてクラスメートと毎日、夜中の2時近くまで寮の自習室で一緒に取り組んだり、手伝ってもらったりと、良い思い出でもあるし、感謝でいっぱいである。また、2週間毎晩19時から22時まで *Frutales Perennifolios* の講義のまとめとして、4クラス合同でグループごとにプレゼンテーションをして討論をするという *exposicion* に取り組んだ。この *exposicion* で日本人の自分が100人以上の前に立つということはもちろん印象に残っているが、メキシコ人の原稿をほとんど見ずに自信を持った発表の取り組み方に圧倒された。日本では原稿を見て発表することが当たり前であったため、本来のプレゼンテーションはこうあるべきだということを感じ、非常に説得力を受けた。

学期末にはUACHでは珍しくない、ストライキもあった。日本ではストライキで学校が1週間以上閉鎖になるということは絶対にありえない事であるが、メキシコでは普通のこと

である。しかしストライキがあり学校が閉鎖されても授業がないわけではなかった。学校の周りの駐車場や広場で授業や試験が行われ、まさに青空教室であった。ストライキが起こることも、意地でも授業を行うこともメキシコらしいなと感じたが、冬に外で授業や試験があるのはさすがに厳しかった。

冬休みには、2人の友達から実家に招待され訪問した。12月19日から26日まではOaxaca州のSan Simon Almolongasという、中心地から2時間ほど離れた距離にある小さな村へ行った。この村についてすぐは、昭和時代初期くらいにタイムスリップしたように感じた。インターネットやテレビの回線が全くなく、水は井戸水、トイレを流す際はバケツで水を汲み手で流す、シャワーを浴びる際は井戸水をバケツでくみ電熱線をその中にいれて温めたお湯を使う、コンクリートで舗装されている道やお店が全くない、家にカギをかける習慣がないなど…すべてにおいて驚きの連続で、この場所で1週間過ごせる自信が全くなかった。日本で当たり前に行っていたことがメキシコにきて当たり前ではなくなっただけで、さらに当たり前でなくなるとは想像もつかなかった。小さな村の生活は時間に使い方にも非常に驚いた。クリスマスシーズンであったのも影響しているかもしれないが1日の2時間〜3時間程度お祈りする時間があり、その他の時間は家事や近所の方々と団らんする時間であり、日本で予定が詰まった生活をしている私には信じられなかった。

しかし、このような場所だからこそ味わえた良いことも多い。ほぼ自給自足の生活であるため食事は本当においしい。野菜もお肉も新鮮で、調味料もほとんど自分たちで作る、料理の際はまきで作るため、時間をかけて作られたものが多く、この村で食べた料理は忘れられない。また、人々の温かさが印象深い。ほとんどの村の人が、私たちに笑顔で挨拶しとても良く接してくれ、なかには料理を作ってくれたり、家へ招待してくれる方もいた。さらに自然に囲まれた生活ができるのも魅力の一つである。私が特に心に残っていることは毎晩、空には星がたくさん輝いていて、流れ星が見られ2回ほど隕石が落下する瞬間も見られたことだ。

この村でクリスマスをお過ごしたが、キリスト教の国であるため非常に宗教心は強い。これはこの村だけでなくメキシコ全土で言えることであると思う。クリスマスの9夜前から毎晩posadaというキリスト(Jesus)の母であるMariaが王の追跡を逃れるために毎日泊まる家を探し、Mariaが過ごすおうちでは歌が歌われパーティーが行われるという行事がある。Posadaではメキシコの伝統的な遊びであるピニャータ(日本のくす玉のような形の中にたくさんのお菓子が入っており、子供たちが棒でたたき割る遊び)も体験することができた。24日から25日に日付が変わる前には、教会に集まりお祈りをし、日付が変わると花火が上がり、酒宴が行われたり、ダンスを踊ったりする。25日の明け方までお祝いが続くが25日の日中は特別なにかをするわけではない。クリスマスが終わっても、1月6日まではいくつかの行事が残されている。日本ではクリスマスは2日のみが特別で、家族や友達、恋人と出かけたりご飯を一緒に食べるだけであるが、メキシコではクリスマスの前後も多

くの行事があり、非常に特別な時期であることを知った。今まで、クリスマスの本当の意味を考えたことは一度もなかったが、この時初めて深い歴史と意味があることを実感した。

この村に着いた当初はマイナスの気持ちしか心になかったが、1週間生活してみると体も慣れ不便な生活も心地よく感じるようになっていた。この村を出発する際に友達の家から言われた「Mi casa es tu casa (私の家はあなたの家)」というメキシコに根付いている言葉を言われとても嬉しかったし、いつかまたこの村の人々に会いに戻りたいと感じた。



26日の朝、Oaxaca州から飛行機でChiapas州へと移動し、もう一人の友達の家へと向かった。大みそかまでは友人がChiapasにある有名なすべての観光地へと案内してくれ、有意義な時間を過ごせた。中でも印象に残っているのがPalenqueとToninaであり、どちらもマヤ文明を代表するピラミッドである。高校の時から理系の道で勉強してきた私には古代の文明をじっくりと触れる期間がなかったので、今まで歴史的な建造物にあまり関心なかったものの、この場所で何か神秘的なものを感じた。Palenqueは古代都市で大きな敷地に多くの建造物が残されており、じっくりと見ると本当に興味深い場所である。しかし一つ残念であったことは、建造物に描かれた多くの浮彫等が博物館に寄贈されてしまっており、レプリカでしか見ることができなかったことだ。世界遺産に指定されているので、非常に魅力的な場所だからこそ、そのままの形で保存してあったら見る人をもっと引き付けるだろうな、と感じた。



今回私はメキシコで年越しをしたわけであるが、日本のように伝統的なお正月の文化というものがなく、あまり年越しをした気分にはならなかった。メキシコではクリスマス同様にお正月も親戚一同が集まり、酒宴やダンスが行われ、1月1日に日付が変わると花火や爆竹をあげ、お祭り騒ぎが始まる。その花火や爆竹の程度がすさまじく、どの家庭も道の真ん中で大量の火薬を使用するので、道の端のほうで待機していないとももちろん危ないし、すべての花火や爆竹があげ終わったころには、煙で空が見えなくなるほどであった。今まで20年間、まったりした雰囲気のお正月しか過ごしたことがなかったので、メキシコのお正月は楽しくもあったが、騒がしく少し恐怖も感じた。

チアパスには1月7日まで滞在したが、年明け以降は友達の家族や親せきと多くの時間を過ごした。近くの別荘へバーベキューをしに行ったり、誕生日会を行ったり、友達の祖母からクロスステッチを習ったりと、家族の団らんを楽しんだ。また、6日は二度目のクリスマスとも言われている「三賢者の日」であり、クリスマスに生まれたキリスト(Jesus)を祝うために三賢者がお祝いの品を持ってくるといわれている日で、クリスマスのように大々的にお祝いはしないものの家族で集まってお祈りをし、ケーキ(パン)を食べる。そのケーキには小さい人形が入っており、切り分けた際に自分のケーキに入っていると、1年間幸福が訪れるという言い伝えがあるそうだ。この家庭でも毎年行われているようで、私も参加したがケーキカットの際はとても盛り上がりゲームをしているような感覚であった。メキシコに来てからキリスト教のイベントと聞くと真面目なもの、神聖なものといつもイメージをしてしまっていたが、このイベントだけはとても楽しめた。



早いもので、留学生活がスタートした8月10日からもう半年が過ぎた。日本では絶対にありえないようなこともいくつも経験し、時には日本に帰りたい・・・と思ったこともあった。でも、だからこそプラスの思い出が更に自分の中に色濃く残っている。

この留学生活全体を振り返り、参加してよかったと感じる点が主に3つある。1つ目に、自分が興味を持っていることについてじっくり学べたことだ。中でも「**Frutales Perennifolios**」と「**Cultivo in vitro de células y tejidos vegetales**」の授業で存分に学ぶことができた。**Frutales Perennifolios**では、以前から興味を持っていた熱帯果樹について学

んだが、特にマンゴーとアボカドについての授業が印象深い。日本では、この2つの農産物は誰もが知っているのにも関わらず、生産がほとんど行われず輸入に頼っているので、栽培過程や品種特性について学ぶ機会がほとんどなかった。授業はスペイン語で行われていたので、全てが理解できたわけではないと思うが、現在有名な品種が生み出されるまでの交配過程について学べたことはとても良い機会だったと思う。先生が、授業の資料をすべてデータで渡してくれたので、大切に保存し自分が熱帯果樹に研究する機会を得られたらしっかり役立てたい。

Cultivo in vitro de células y tejidos vegetales は、大学に入る前に一番興味を持っていた試験管培養について実践的に学習できた。トマトやナスなど日本でも実際に行われている園芸作物から、メキシコならではのテキーラやメスカルの培養も行なった。農大の授業でも2回ほど培養の実習を行ったが、大まかな培地の作り方や培養の手順など基礎を学習しただけであったので、UACH では培地に含まれる物質や形態や、培養する植物の部位など様々な条件で実習を進められ、応用を学べたと思っている。また、カルスの培養ではコンタミネーションの発生にとっても悩まされ、実験がうまく進まないことがあった。原因を考え修正箇所を見直しながら実験を進める過程が、今後取り組む卒論でも必ず起こることであり、事前に一度経験できた良かったと思う



次に、授業の一環として研修旅行に参加し、メキシコの農業の実態を目にすることができたと共に、生産者の声を聴くことができたことも良い機会だった。前回の報告書でも述べたが、輸出国側の実態というのは日本にいて直接学ぶことができないので非常に充実した研修旅行だった。輸入国側の一人として、輸出国の実態を理解し、輸入国側がさらなる農業の発展、食の安全保障に関して何ができるのかを考えていかなければならないと感じた。

また、スペイン語の取得も今後の自分の将来に役立つと考えている。留学する前は、英語で生活できると甘く考えていたが、実際は授業もスペイン語であるしクラスメートや先生

も英語が喋れない人のほうが多く、正直苦労した。留学前にもっと真剣に勉強しておけばよかったと後悔することもあったが、UACHでのスペイン語の授業や自主学習により今は日常的な会話はスペイン語でできるほどまで成長した。スピーキングによりスペイン語の実力を伸ばしたので、文法面ではまだまだであるしもちろん知らない単語も多いが、今持っている実力を劣らないよう、現地の友達との交流をSNSで続けていきたい。

しかし、留学生活で残念だったことも振り返るといくつかある。中でも最も悔しかったのが、卒業論文の実験ができなかったことだ。メキシコに到着してから、1か月後に担当の先生と相談し、実験室を紹介してもらったり計画を一緒に立てたりはしていたものの、実験材料にする予定だったマンゴの収穫時期が12月の中旬～下旬ころから始まるということで手配が難しいことと、手配できても数が限られたり、同じ条件で反復実験ができないことよりすぐには始められなかった。また、学校の冬季休業が当初の予定よりも延長してしまったため時間が足りずに実験を行うことをあきらめることとなってしまった。日本でマンゴの実験を行うとなると、非常に高額であり輸入後の果実で実験を行うため限られた処理でしかできないなどの問題があるため、現地で実験を行うことが望ましかったが非常に残念な結果となってしまった。しかし、実験計画などを手伝っていただいた先生方や先輩方には非常によくしていただいて、感謝している。英語やスペイン語でコミュニケーションをとることも非常に難しかったが勉強になったし、実験を行うまでの過程を一度経験できたことは今後、日本で卒業論文を行う上でも役立つと思う。

今後自分の将来において、この留学生活が役立てる機会があればよいと思っている。現在、大学院進学を目標にしているので日本より中南米の農業をサポートできるような研究や、日本の食の安全保障の点から中南米の農産物を向上させるような研究などをできたらいいのではないかと考えている。現地で勉強した一人として、中南米をサポートする方々のお手伝いができる機会が得られることを楽しみにしている。また、大学院や社会に出た際にスペイン語を使う機会があれば、さらに良いと思う。

最後に、今回の半年間の留学サポートしてくださった、チャピング大学の先生方、クラスメート、現地の日本人の方々、農大の国際協力センターの先生方、馬場先生、山口先生、ありがとうございました。様々な思いが残る留学生活でしたが、留学に行ったからこそ味わえたこの経験を活かし、今後の自分の成長に少しでもプラスになれば良いなと考えています。